



発行日 2006年8月20日 発行人 福島伸悦

編集責任者 浅井宣亮 編集担当 館盛寛行 編集委員 亀野 菅原 内山

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市長南区上永谷5-1-3

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.32



□サンゼルス禅宗寺の盆踊りでの和太鼓演奏

CONTENTS

●巻頭	活動を通してよろこびを伝える	南アメリカ国際布教総監 采川 道昭	1
●特集	日本の禅・世界の禅ー在日34年の体験から	長崎総合科学大学 教授 フライアン・パークガフニ	2
	日本仏教はいかに世界貢献をなすべきか	広島大学大学院 教授 町田 宗鳳	6
●国際レポート	北アメリカ 前角インスティテュート オープン記念	善光寺 住職 黒田 博志	9
	北アメリカ お盆カーニバル in ロサンゼルス		10
	ハワイ ハワイ島ヒロ大正寺創立90周年記念式典	ヒロ大正寺 住職 秋田 新隆	12
●寄付者・会費納入者名簿			14
●SZI通信	動静報告・編集後記		15
●第8回 ゆめ観音 in 大船 案内			16

巻 頭

活動を通してよろこびを伝える

南アメリカ国際布教総監 采川 道昭



ご法愛とご縁を頂戴して、昨年5月に南アメリカ国際布教総監としてブラジルのサンパウロにある仏心寺に赴任致しました。それ以来、法友はじめ多くの方々に支えられ助けられてまいりました。この紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

さて、仏心寺の行持は暁天坐禅からはじまり、夜坐到終わる毎日ですが、日中は法供養のほか数々の文化活動があります。それらは、書道や生け花のクラス、ご詠歌、仏教コーラス、料理教室、和太鼓の教室などです。坐禅もそうですが、これらの活動は宗教や宗派を超えて参加者が集う活動です。法供養にしてもその参列者は施主を除いて色々の宗派に属しているわけです。

そのような中で共通しているものは何かと言えば、ひとつのことに集中することによって「自己を忘れてゆく」ということです。「我見、我執」を越えて活動してゆく

と心が落ち着き、やがてよろこびが沸いてくるということです。高祖さまのお示しに「仏道をなろうというは自己をなろうなり、自己をなろうというは自己をわするなり、自己をわするというのは万法に証せらるるなり云々」とあります。これは勿論坐禅のことを指してのお示しですが、基本の坐禅を超えてもっと広く日常の活動の隅々まで行き渡ったお示しであると受け止めています。またそうでなくては、仏道の意味がありません。作務や行鉢にしてもそうですが、特派講師の先生を拝請し、南米各地に足を伸ばして布教や詠賛歌の講習をして戴くのもこの「自己をわすれて」打ち込むことによって大きなよろこびを共有する活動であると言えます。

我々の仕事は、このよろこびの輪を広げてゆくことに尽きるのではないのでしょうか。赴任して最初の仕事は福祉施設の慰問でした。このことがそれをいみじくも象徴しています。

特集 / 大本山總持寺ワークショップ講演録 2006.6.23

日本の禅・世界の禅－在日34年の体験から

長崎総合科学大学教授 ブライアン・バークガフニ

本日は私を講師として御招きいただき心からお礼申し上げます。

特に若い雲水さんの姿を拝見すると若い頃の自分を思い出して、懐かしさと仏縁に感謝する気持ちで一杯です。また、SOTO禅インターナショナルの企画を含めて様々な活動をされていることに敬意を表します。

禅は、もはや日本や東洋だけのものではなく、国際的なものになりました。禅を伝えること、国際的なレベルで語るということは本当に大事だと思います。現在、世界で様々な問題が起きています。宗教の対立、文化の対立の中で、日本の禅は大変重要なメッセージを含んでいると考えております。特に若い皆さんには肝に銘じてご活躍いただきたいと思います。

■ ZENとの出会い

私が初めてZENという言葉を目にしたのは高校生の時です。その言葉自体が不思議な魅力を持っていたことを印象的に覚えています。エキゾチック（異国情緒）という言葉がありますけれど、Zの大文字は、西洋人には不思議な感覚を与えます。英語の固有名詞の中で、Zで始まる言葉は殆んど無いし、普通名詞でも少ない。ZENという単語自体、その意味・背景がわかる前から不思議な魅力がありました。英語にZEROと言う言葉がありますが、ZEROもインドでできた概念で、欧米には無かった発想です。何も無いなら数える必要もないからです。このように、ZEROにしても、ZENにしても不思議な魅力のある言葉なのです。欧米人がZENに関心が高いと言われていますが、たぶん多くの方は私と同じように、ZENの持つ言葉の魅力から惹かれていくのかなと思います。大学時代には、ZENについての本など

を読み漁り、そこで、言葉にある背景にも興味を持つようになりました。一番大きな影響を受けたのは、ドイツ哲学者ヘリゲルです。ヘリゲルは大正時代、東北帝国大学の哲学の先生として招かれて、その間に弓道を研究するようになりました。ヨーロッパに帰ってから出版された『弓と禅』は、日本語にも翻訳され、西洋人から見た禅、日本の文化の古典とされています。その本の中で、彼が最初に弓を持つ場面があります。小柄な師匠が筋肉もそんなに付いていないのに弓をビューンと引いて矢を放つことが出来る。なぜ自分の方が体力があるのに弓を引けないのか・・・それは、鍛錬、呼吸の力という、いわゆる腹が据わっている、英語に翻訳できない、そういった根本がすべて禅に繋がるものだ、ということに師匠に教えてもらったと考えています。研修を重ねてようやく弓を引けるようになった時、師匠から不思議なことを言われます。「自分から意識して矢を放つな」・・・しかし、当然、的があって、それを狙う自分がいて矢を放つのではないか。・・・師匠は続けます。「葉に雨が溜まり、臨界にいたれば自然に水が落ちる。その水滴と同じように、弓が自分から放つようにしなさい」・・・私が翻訳本を読んだとき、この言葉に本当に驚きました。この、水滴のごとく矢を放つとはどういうことだろう・・・それを知りたくて日本にやってきました。

もう一人、大きな影響を受けたのが鈴木大拙先生です。ご存知のように沢山の本を欧米で出版されており、禅に興味を持つ人は必ず読むといって良いと思います。しかし非常に難解で、水滴と同じような表現があり、繰り返し繰り返し、「西洋人には禅がわからない」という表現がなされています。私はむきになって絶対にわかってやるという気持ちになりました。大拙先生に公案を与えられたようなものです。

■ ZENを求める旅

ZENについて哲学的なレベルで興味を持った私は旅に出ました。ずっとヨーロッパから中近東、インドまで行きました。インドでもヨガ道場やヒンドゥーのアシュラムと言われる施設を訪ね、師匠を探して東洋の真髄を探して回りました。ある日のことです。インド北部の道場で、ある老師が講師として話に来ていました。ヒンドゥー語だったのですが、絵に書いたような、洞察力をもった方だと言うことがわかりました。話の後で、その方に「私は瞑想がしたい」と申出ました。私の意味は「あなたに教をを請いたい」という意味で言ったのですが、その方は、ただ「どうぞ」と言うだけでした。私はとても不満に感じました。しかし、今振り返ると、それは一番大事なことだと思います。つまり、



国際布教物故者法要：導師大山副監院老師

瞑想をしたいなら、何のためにするのではなく、今、ここでしなさいという端的なことを教えていただいたのだと思います。ご存知のように、禅はサンスクリットのジャンナが音訳されて禅那となったのですが、本来は、インドの言葉でひたすらに「専念する」という意味だということです。私も長い間坐禅をして来ましたが、坐禅は努力してできるものではなく、努力や目的意識を超える、たとえばコンサートで好きなロックバンドの音楽を聴いて、ノリにノって、専念する、傍目からなぜその音楽を聴くのか、好きなのか、どう思うかそんなことはどうでもいい・・・そういった境地、心境なのだと思います。最近の教育システムは、今自分のやっていることにより、何かを勝ち取る。つまり何かを知りたい、ということではなく、勉強をして受験など別の目的を果たすための勉強になってしまっています。これは「禅」とはまったく違った方向の教育の考え方を提示しています。好きだから音楽に夢中になり、音楽から得るものがあるのであって、文化人になるために音楽を聴くわけではありません。禅の考え方はそういうことでしょう。曹洞宗の只管打坐は、まさにこの考え方なのだと思います。道元禅師はそれを示しているのでしょうか。ただ、それを実行することは難しいものです。

■ 日本の禅との出会い

私はマレーシア経由で日本に来ましたが、インドでなかなか自分の探しているものが見つからなかった時に、日本の禅の思想が東洋思想の頂点だということに気づき、日本を目指すことになりました。マレーシアで私が泊まっていたユースホステルで、日本留学後インドに向かうフランス人にいろいろなことを教えていただいた中に、奈良教育大学の教授の阿部正雄先生の名前がありました。今思えばそれが仏縁でした。日本のことも日本語も何も判らない状態で、阿部先生の連絡先ただ一つだけを持って日本にやってきました。その仏縁のお陰で私の師匠となる愛媛県の仏心寺の山岸善来老師を紹介していただきました。そして仏心寺で2年過ごさせていただいた時のことです。全てを捨てて、親にもカナダに帰らないという手紙を送って、本気が入ったわけですが、最初は理想郷とは異なるものでした。ある日、同じ年代の学生が庭の掃除をしていました。門のところに仏心寺の熱心な檀家さんの個人タクシーが止まり、運転手が挨拶をした、その時、「卍」タクシーという名前を見て、その学生が急に「なんじゃ、これは！縁起でもない」と笑い出しました。私が、「卍がナチのマークに似ているからですか？」と聞いたら、「そうではなく、お寺のマークは霊柩車に乗るようなものだ、縁起でもない」・・・私は大きなショックを受けました。私が今まで全く知らなかったお寺の役割を知りました。お寺は葬儀、葬式と結びつくということを知ったのです。これはとても重要なことだと思います。葬式仏教批判ではなく、私の驚き、つまりお寺の役割が何百年の間に、日本人には当たり前のこととして定着している潜在意識としてのお寺の文化は、日本人の精



神文化の中に大きな役割を果たしている、それを西洋人が知らないと言うことなのです。

鈴木大拙は、このことについて言及していないのですが、西洋人が理解できない禅とは、こういうあたりかと分りはじめてきました。曹洞宗も海外に沢山のお寺があり、その最初の役割は、海外に移住した日本人の精神文化の支えとして出来たのだと思います。それが、戦後、私も含めて禅を知りたいと言う西洋人が多く訪れるようになって、禅センターも数多く作られました。

カナダに居たときにニューヨーク郊外の禅センターに行ったことがあります。IBMが寄付をした大きく綺麗な施設があり、30人ほどのメンバーが過ごしていました。しかし、私は、これは修行ではなく修行ごっこなのではないかと感じました。日本の専門道場のルール、日常生活を押し付けることは出来なかったし、男女平等に配役を振り分け、日本語の名前を付けて喜んでいたが、漢字が読めるわけではない。ここに、日本に千数百年もの間育てられてきた仏教の精神文化をいきなり理解してもらうことの困難さを痛感しました。しかし、これが現実です。

■ 言葉に対する考え方の相違から学ぶこと

仏心寺では、老師と私の2人だけの生活でした。一生感謝しても仕切れないほどの親切を受けた恩師ですが、私がいろいろと禅について老師に尋ねても、「そんなことはどうでもいい、皿を洗え」といった感じですが、畳のへりを踏んだり草履をそろえなかったり、朝から番まで細かいことで怒られていました。一番困ったのは、老師に「おーい」と呼ばれ、「はい」と答えたときに、どんな風に答えても認めてくれませんでした。老師が本堂の仏壇で掃除をしていた時にやはり「おーい」と呼ばれた時に、今度こそ！と、気合を入れて「はい！」と答えたら、やはり、怒られました。後から分かったのですが、老師は脚立を持ってきて欲しかったのです。私は超能力者でもテレパシーの能力も無いんだと余程言いたかったのですが、老師から見れば、私が本当に専念していれば老師が何を欲しているのか分かるということだったのでしょ。後で妙心寺に行ってから分かりましたが、それは超能力でもテレパシーでもなく、当たり前のこと

としてあるものだということが分かりました。挨拶運動がありますが、「おい」と言われて「はい」と答える。人と人とが隔たりの無い鏡になること。「挨拶」という言葉は禅語に由来しますが、これは言葉で説明できない、体験しなければ出来ない日本的コミュニケーションだと思います。

ある人との会話の中で、私の「結婚してますか」という問いに、「はい」「いいえ」の答えを期待していたのですが、彼は「いちおう結婚しています」と答えました。・・・これは、どのあたりの結婚の状態なのだろうか、とても不思議でした。もしかしたら離婚しかけているのだろうか。しかし、これは、西洋人にはばかしているように感じますが、何百年も育まれてきた「結婚しているけど、あなたに自慢するほどではない、普通の結婚です」というへりくだった意味を持たせているのです。このような、相手を気遣うと言う心は西洋人も大いに学ばなければならないでしょう。川端康成は、次のように書いています。「日本語では意味が暗示される・・・」これは西洋では通じないことです。言葉で言わなくてもわかるというコミュニケーションの方法を指しているのだと思います。

日本語に一を聞いて十を知ると言う言葉がありますが、西洋的な考えだと十を聞かないと十を知ることには出来ない、これが当たり前です。西洋では雄弁であり、一生懸命説得することが重要視されます。英語のwordという言葉は約束と言う意味もあります。つまり言葉が契約であり、軽く言葉を発することは出来ない。西洋哲学は言葉の意味を追求するところにあります。これは余り知られていませんが、日本語の濁点は、西洋人が導入したものです。私の略歴で禅の修行の後、NHK大河ドラマの神父役で出演という異色な経歴になっていますが、正に、私の演じたバリニャーノなどの神父たちが日本語を勉強していて、「ナカシマ」と書いてあるのに、日本人に言わせると「ナカジマ」と読んでいる、違うじゃないか。場合によって「シ」と読んだり「ジ」と読んだり。西洋人たちはどちらかにして欲しい。長崎に佐世保と言う町があるのですが、人によって「サセホ」と読んだり「サセボ」と読んだりする。私が「どちらが正しいですか？」と聞くと、「いえ、『ほぼ』同じです」。ますます理解できなくなります。つまり、ナカシマと読んでも、ナカジマと読んでもどちらでも良い、言葉は流動的で余り頼りにならない。人間の真心を伝えるのに言葉は不十分なものだということがあるのだと思います。寅さんの「そこまで言っちゃあおしまい」というのがありますが、西洋では逆に、そこまで言わないと分からないとう、言葉に対する全く違う概念があります。

ことわざの比較をすると、日本語に「口は災いの元」というのがあります。いくら理論的に理路整然と意見を言っても、災いを引き起こすと言うことですが、英語でも似たことわざがあります。しかし、「口」ではありません。英語では「Money」です。非常に印象的な対比です。先ほど、コンサートの例を出しました。音楽を楽しんで夢中になって没頭している。そのような中で「楽しいですね。どう思



いますか」、そんな言葉は雑音にしかない。禅に没する中で、言葉は邪魔になるという考えです。例えば、日常生活で「さよなら」「こんにちは」というのがあるのですが、私が日本に来た時に知っていた日本語は「さよなら」と「悟り」の二つだけでした。友だちを作りたいのに「さよなら」しか言えないのはあまり役に立たなかったし、日本に何をしに来たかと言われて「悟り」と言っても、この人はおかしいという眼で見られたり。その中で、「さよなら」という言葉は、私は英語の「Good bye」と同じだと思っていました。「Good bye」という言葉は、ちゃんと別れの言葉として表現されています。つまり、別れてあなたが幸せな道を歩みますよという言葉です。中国語で「再見」も、また会いましょうという意味があります。世界の言語を見て、殆どどの別れの挨拶が、相手の将来の幸せを祈るか、再会を願うかのどちらかです。しかし、日本語のさよならは、何も表現されていません。あえて意味を取れば「左様ならば＝そのようであれば」ということです。肝心な言葉の部分が省略されています。何故なんだろう。どうぞ気をつけてとか、また会いましょうの部分が足りない。人と別れてその悲しみ、切なさは、とても言葉では表現できない。だから省略されている。言葉は人間の真心を伝えるのが不十分だということが、この挨拶の表現でも見ることができるのです。「こんにちは」も、直訳すると「Today」です。ロンドンとかニューヨークで、人と会った時に「Today」と言ったら、やはり頭がおかしいと思われるでしょう。しかし、日本では、言わなくても以心伝心で分かるのです。そのようなことが日本の仏教、禅にみごとに表現されているのです。

ZENというエキゾチックな響きに引かれて、日本にやってきた人がこのあたりを理解するには相当時間がかかると思います。鈴木大拙先生が外国人には禅が理解できないといわれても仕方が無いと思います。私の日本人の妻と、テレビを見ていて、お茶を飲んでいて、ちょうどある女優が画面に映りました。私は顔は知っていましたが名前はどうしても思い出せない。私が無気なく「この人は、あの人かな」とつぶやいたら、妻は直ぐに「違う」と。これは本当に吃驚しました。私の心が全部読まれているのではないか

とぞっとしましたが、確認してみたら恐ろしいほどちゃんと分かっている。つまり、私がこの人を見て、誰と勘違いしているのかが言われなくても分かるのです。20数年間一緒に過ごした人ならば、この人を見たらどういうリアクションをするかが分かる。先ほどの脚立の話と全く同じです。「おーい」と言われて、私が脚立を持ってこないと言うのは私が一心同体となっていないからです。愛情というのは西洋的な表現かもしれませんが、非常に親密な人間関係の中で、日本人独特のコミュニケーションの方法が成り立っているということです。30年以上日本にいて、とても素晴らしいと思いますし、禅が日本の文化に大きな影響を与えていると言われているが、こういうところに表れているのではないかと思います。

■ 若い世代に望むこと

私は、この言葉を使わずとも相手に伝えると言う文化は素晴らしいと思いますが、特に若い皆さんに考えて欲しいことは、これは必ずしも国際社会で通用しないというジレンマです。若い人を見て感じるのは、日本の「さよなら」とか「こんにちわ」という言葉の背景をきちんと理解しているかと言えば、そうではない。住んでいる長崎の歴史について理解していたり、誇りに思っていて勉強しているという感じでもない。これは、日本の欧米化、個人主義の影響もあるかと思いますが、しかしながら西洋についての理解があるかといえばそうでもない。西洋人が大切にしている論理的に説明する表現力を身に付けているかといえばそうでもない。中途半端なところでうろろろしているという印象です。明治時代に、「和魂洋才」という言葉が流行りました。長い鎖国の時代から目覚め、欧米に負けないように様々な技術を取り入れて近代化するという、その中で、日本の精神文化を大切に、しかも西洋の新しい技術を取り入れようという明治時代の云わば座右の銘だと思いますが、私は、21世紀の今、もう一度これを見直していく必要があると感じます。具体的には、日本の禅の心を大切にしつつ、西洋の技術の代わりに、表現能力、コミュニケーションスキルをもっと身につける必要があるでしょう。それは言葉を不十分として見る文化を西洋風に言葉を活用して表現するという矛盾のように感じるかもしれませんが、決して出来ないことはありません。是非若い皆さんで工夫して実行して欲しいと思います。

■ 「禅のこころ」がこれからのキーワードに

僧堂を離れて長崎に行きましたのは、長崎に魅せられて、どういう街なのかを知りたかったからです。その研究に専念する際に、お寺での9年間の生活でお世話になったことが山ほどあります。カトリックの家庭に生まれた私は祈りが大事なものでした。祈りは、神様に何かを祈るというように他動詞として使っていました。病気が治りますように、というように、結果をお祈りするというのが概念でした。しかし、禅での祈りはどういうことはどういうことか、祈り本

当の意味は、坐禅の精神と全く同じだということに確信することが出来ました。西洋の禅、日本の禅に隔たりがあっても、根本的な部分で一致するというのが私の結論となっています。

もう一つは、皆さんが、まさに修行されている中にいると思いますが、僧堂の経験がまさに重要だったということです。季節感や、全く無駄をしないという精神が、僧堂ではあたりまえのことでも、世の中にそれを実行している人は非常に少ない。それがこれからの時代に重要だと思います。妙心寺で一番驚いたことは、消し炭でした。かまどでご飯を炊く時に、桶を一気に出す。そのときに、炭を燃やし切ってしまうのではなく、水につけて天日で干して、七輪の炭として再利用する。この心がこれからの時代に必要な心です。皆さんが専門僧堂で実行している一つ一つが、これからの大きな鍵となっているのです。

もう一つ、長崎の禅寺の話ですが、境内に茶筌塚というのがあります。石に茶筌の石像が乗っていてただ茶筌塚と彫ってあるだけです。日本文化を知らない外国人は、これを見て「すごい、何という偶像崇拜なんだろう。こんなものを祀って平伏して拝むのか」というように感じるかもしれません。しかし、これは言うまでも無く、供養です。使い終わった道具をポイッと捨てるのではなく、それを大切に取っておいて年に何回か茶人たちが感謝の心を込めて供養する。この心、文化に触れることが出来て、とても幸せに感じます。日本に来て本当に良かったと思います。少しでも、世界に茶筌塚の心が広がっていけば資源の問題さえも解決していくことができるのではないかと思います。

最後になりますが、日本の心、日本の文化、特に専門僧堂の中で長い歴史の中で育まれてきたことは世界に伝えて、世界の様々な問題解決にきっと貢献するのだということを、若い雲水の皆さんに誇りの気持ちとして持っていて欲しいと思います。SOTO禅インターナショナルの精神も、正にその精神だと思います。最近はいラク戦争で国益ということになってしまっていますが、これからは、国益ではなく、茶筌供養のような地球益の心が必要でしょう。

長い時間ご静聴有難うございました。



スタッフ一同・講師先生を囲んで

日本仏教はいかに世界貢献をなすべきか

広島大学大学院教授 町田 宗鳳



道元禅師の「無」

私は、仏教には文明の反転力があるのではないかと考えております。ガラッとひっくり返していく。一気にはいかないですが、百年二百年の単位でひっくり返していきます。そして、その反転力の中枢に原始仏教以来の仏教思想があるわけですが、更にそれを凝縮して最もエッセンシャルなものを引き出してきたのが、私は道元さんではないかと考えているわけです。

西欧文明を「有」の文明とし、アジア的文明を「無」の文明と言いましたが、これは決して「虚無」の無ではありません。非常に豊かな「無」です。道元禅師が中国からお戻りになった際に、「空手にて郷に還る」とおっしゃった。これは、非常に大きなものを背負ってきたから、手ぶらで帰ってきたとおっしゃっているわけです。背負いきれないくらいの「無」を背負ってこられたのです。手に持てるようなものではありませんでした。

私の好きな言葉を引用させていただきます。「尽大地は、自己の法身なり」という言葉です。「無」というものには、全然否定的なニュアンスはありません。実体のないところに実体があるという確信です。

しかし、世界ではこれが見えないことが多々あります。神がアッラーであるとか、エホバであるとか、ゴッドであるとか思っている人にとっては、「尽大地は、自己の法身なり」という見方がなかなかできません。ですから、俺たちの神を汚したとか、冒涇したとか言って怒り始めるわけです。逆に、我々は怒りようがありません。「尽大地」ですから、空気みたいなものです。これが「無」

の文明だと思うのです。これを私たちは相手側に伝えていかなければなりません。最初に申しましたイスラムと非イスラムの対立も、こういうところに引きずり込んでこないと話が通じないわけです。同じような土俵に上がってしまうと、全然仲裁はできません。

『正法眼蔵』の有時には「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。時なるがゆえに時の莊嚴光明あり。」と記されています。「時」というのは、「無」だと私は思っております。「時すでにこれ有なり」というのは「無すでにこれ有なり」、「有はみな時なり」は「有はみな無なり」と私なりに解釈しております。「無」が莊嚴光明なのです。光り出すわけです。これは頭の中で考えられたのではなくて、実感としてこの言葉を書かれたのだと思います。

ですから、「我が宗祖道元」くらいに言って欲しくないのです。世界遺産の道元禅師をもう一度発掘してこなければいけません。宗門のボキャブラリーだけで道元を語ってはいけません。大変な宝物を見せて下さった方なのです。

コミュニケーションの必要性

また、コミュニケーションということも課題です。日本人は本当にコミュニケーションが下手だと、つくづく思います。日本語がコミュニケーションに向いていないことにも原因があります。断片的に単語をちょろちょろ述べても相手に通じますから、なかなか論理的なパラグラフ（段落）として話す癖がついていないのです。私は色々な国に行って話をしたりするものですから、日本人とは違う話し方の癖が付いてしまい、しつこく話すようになりました。しかし、それができるようにならないと、異文化異教徒の人達と話が通じません。少し話しただけで、相手がわかってくれないとか、以心伝心とか言っている場合ではないのです。例えばイスラム教の会議などでは、十人が十人もう止めてくれと言いたいくらいの大演説をするわけです。皆が持ち時間15分と言っても、40分に、例えば道元禅について語るといった場合は、ただ事ではありません。相当のコミュニケーションスキルを身に付けていなければなりません。日本の小学校からの教育に問題があると思っております。自分のクラスでは、いつも学生にディベートをさせています。何に関してで

も構わないから、白と黒をはっきりさせます。先週は秋田県の国際教養大学で生命倫理を英語で教えておりました。そこでは、例えば臓器移植は是か非かという論題をわざとつくり、本人達の意向にお構いなく学生を二つのグループに分けてディベートさせます。また、クローン胚を利用すること等についても是か非かといったことも論争させたりしますが、公案のようです。教室の中で机を二つに分けて1時間くらいディベートさせます。こういったことを繰り返ししないと、コミュニケーションといったものは身に付きません。

私の師匠は厳しい禅宗僧侶で、問答無用の人でしたから、質問や反論はさせてもらえませんでした。師匠と議論などできませんでしたし、修行中は本も読んだことはありませんでした。それが、突然アメリカに行って神学部で神学を学んだわけですから、その時のストレスは酷くて、円形脱毛症になってしまいました。しかしこれくらいしないと、大事なものは身に付かないのです。

ですから、道元さんを褒め称えている内はまだまだダメだと思います。全然道元さんのことを知らない人に、そのすごさ、「無」の文明のすごさを説く。あるいは、「個」というのは虚妄の「個」であるということを納得させることが重要なのです。

「一」なる＜いのち＞への回帰

私の好きな道元さんの言葉に「自己をはこびて万法を修証するを迷いとす。万法すすみて自己を修証するは悟りなり。」また「仏道をならふというは、自己をならふなり。自己をならふというは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。」というものがあります。これはもう、こんな「個」をはるかに超えてしまっています。私はあえてこれを「一（いち）」と呼んでおります。「個」を超えたところに「一」が見えてくる。これは全体という意味の「一」です。華嚴経という「多即一」の「一」です。私は「一」を「いのち」と書いたりもします。個人的な生物学的な命ではなく、永遠に続く宇宙的な生命。「万法」というものはそういうものだと思っております。

道元さんという方は、非常に頭の良い方だったと思います。頭が良い上に、常に坐禅して禅定を深めておられた。だから、このように輝く言葉が出てきたのではないかと思います。したがって、曹洞宗の道元さんを宣伝するために外国に行き、道元さんの話をするのではなく、今「有」の文明が行き詰まりつつある時に、いかに「無」とか「一」とか「いのち」とかいった観点を手に入れることが人類にとって火急の用を要することを訴えていく。こういうコンテキストの中で道元さんの話をしなければならない。

海外の禅センターを開くとか、東南アジアなどでのボランティア活動も大事です。大事なことなのですが、私からするとそれは補足的なことです。もっと大事なことは、思想の力を手に入れることです。もっと思想的に世界貢献をしていかなければならない。世界の人達の価値観、現代のように消費経済とか物欲とかにあおられている人心を、方向転換しなければならない。「有」の文明にすっかり染まって欲望に駆られている私たちに反省をもたらす。本当に自分を解放して自由になりたいければ、「無」の輝きを見なさい。「いのち」の輝きを見なさい、ということを書いていかなければなりません。

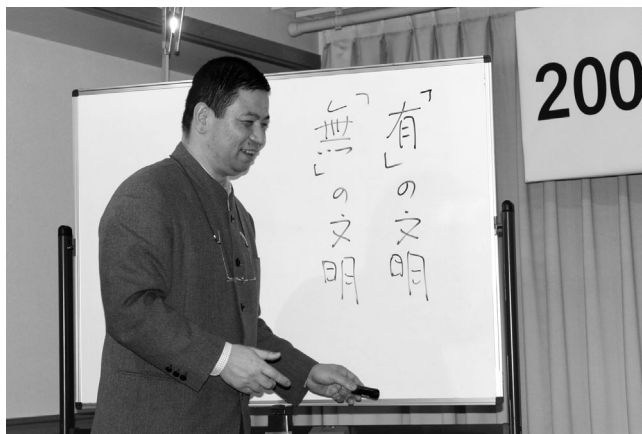
体験の重要性

そういう訴えをする上で、大きなヒントを下さっているのが道元さんだと思います。『正法眼蔵』を直訳するだけではダメなのです。ここにどれだけ大事な情報が込められているのかということを、一度咀嚼して相手に伝えなければならない。例えば、イスラム教徒がコーランの直接引用で40分の大演説をしてもこちらは耳を塞いで、もう止めてくれと言いたくなるだけです。マホメットは偉かったかもしれませんが、アッラーは偉大な神でしょうし、コーランも素晴らしい聖典かもしれませんが、もう結構ですと言いたくなります。

そうではなく、それを飲み込んで腹に落として現代のボキャブラリーで話したとき、それが相手の心を打つのです。現代の日本仏教は、こういう努力を宗派関係なくしなければなりません。「葬式仏教」などと批判されても相手にする必要はありません。それはそれで、日常の行事として行えば良いのです。もっと大事な仕事があります。それは「体験を深める」ということです。宗教体験という意味でもあるし、人生体験という意味でもあります。

私は『前衛仏教論』の中で永平寺批判をしましたが、それは余りにも形式主義が走りすぎているからです。道元禅師は「身の結跏趺坐すべし、心の結跏趺坐すべし、身心脱落の結跏趺坐すべし。」とおっしゃっております。そうしたら我々は歩いていても食事をしていても坐禅なわけですので、そういうことを正しく理解した上に永平寺の修行があるのでしょうか。しかし、我々の結跏趺坐というものは死ぬまで続くものです。体験は僧堂を出てから始まると思います。自分は個人的には、大徳寺を出てアメリカに渡ったときに私の修行が始まったという気がしております。

伝統は大事ですけど、伝統に寄りかかっているだけではダメだと思います。また、人生体験ということも宗教家にとって大事だと思います。娑婆の人の方が苦労しているわけですから。娑婆には腹の据わった人達がたく



さんいます。そういう人達に法を説くということになれば、自分達もビジネスをする必要はありませんが、やはり人生体験を深めていく必要があります。そうでないと話に迫力がありません。宗祖がこういうことをお書きになっているから、といった受け売りでは伝わりません。

教学だけでなく、もっと普遍的な学問を積む。宗祖を心理学の観点から見てみるとか、教育学的な観点から見てみるとか、あるいは東西の思想の中で比較的に見て学問を深めていくことも必要でしょう。と同時に、宗教体験や人生体験も深めて知識と体験の両刀遣いにならないと、現代において大事な文明的役割を果たすことは難しいと思います。

都内であった若いお坊さん達の集まりに、講師として呼ばれていったことがあります。各宗の若いお坊さん達の集まりで、なんとかして現状を打破しようという意気込みをお持ちでした。しかし一つ残念だったのは、自分の本職を徹底していないということです。例えば、禅宗であれば若い時に徹底的に坐禅をする。日蓮宗であれば、題目を徹底的にやる。そういうところを抜けた上で、宗門の批判をするのなら説得力があります。火の中に飛び込まず外野にいて、我が宗はどうのこうのと言うのは甘いです。一度火の中に飛び込んで、そこから火を奪い取ってきてその火で火を付ければいいのです。このくらいしないと、ますます日本の仏教は元気がなくなってきますし、文明的な役割は果たせないと思います。そういう意味での危機感を持っていただきたいと思います。

世界の中での日本仏教

私は『前衛仏教論』のなかで、核家族化が進み、少子化がひどくなり檀家がお寺を離れていきますよ、ということも書いております。しかし、そういう危機だけではないのです。人類が危機に直面しているわけですから。このようなときに日本仏教が黙っていてはいけません。日本仏教を世界に広めるために話しに行く必要はありま

せん。しかし、日本仏教が抱え込んでいる、お釈迦さんから脈々と伝わってきた「いのち」の流れを次の世代に伝える責任はあります。

現在インドには仏教はほとんどありません。数では多い上座部仏教にも問題があります。少し前にインド政府主催で国際仏教コンクラーベというものが開催され、私も招かれて出席しました。各国の高僧といわれる方が壇上でお話をなさいましたが、残念ながら耳を傾けたいくなる話をなさった方はいらっしゃいませんでした。皆さんが八正道、四聖諦といった教科書のような話をされました。アフリカのエイズや核戦争、差別問題に対して釈尊の教えをどのように応用していけばよいかといったような問題意識は感じられませんでした。特に上座部仏教では、仏教は篤く尊敬され供養されています。そういう現状に甘えているのではないかという印象を持ちました。

世界遺産としての仏教なのですから、自分達の現状に満足してはダメなのです。こういう意味では、日本仏教は非常に有難い立場にあると思います。先進国として経済が発展して、人心はますます宗教から離れていくという大変な状況にあります。だからこそ、自覚できるのです。大事に大事にされていたら、これで良いということになってしまいます。

ある意味日本は「有」の文明の最先端にいます。最先端にしながら、その本質の部分で「無」の文明を大事に持っています。どれだけ表面的にはアメリカに近くあっても、中枢にある「無」の文明というのは、縄文時代から今日まで伝わっています。

ですから、日本人の役割あるいは日本の宗教家の役割というものは実に大きいものがあります。自覚次第です。これほどおもしろい時代に、日本にお坊さんとして生まれ落ちた事は、有難いことですし、エキサイティングなことです。もっともっと広く学問を積んで、もっともっと深く体験を深めていく、そういう努力が必要だと思っています。



… 国際レポート / 北アメリカ …

前角インスティテュート オープン記念

横浜市善光寺 住職 黒田 博 志



MAEZUMI INSTITUTE全景

私は師父大圓和尚の予期せぬ遷化により横浜善光寺を引き継ぎ住職の拝命を受けました。善光寺を一時はどのように引き継ぎ発展させればよいのか、唯唯無我夢中でした。さいわい師父はあらゆるポジションに多くの立派な人、人材を残してくれました。お蔭で寺にはなにもなかったように滞ることなく今日にあること全く師父の余徳と感謝しています。

さて、いただいたテーマは「前角インスティテュート」師父の実兄、私の伯父、前角博雄老師は、いまより45年前単身渡米欧米人対象の禅の開教に従事、以来はじめて日系人社会以外の人々に禅を伝えた。遷化された時点の弟子は、印可1名、嗣法の弟子12名、得度者50余名。弟子たちは世界各地に布教を展開し、関わる禅センターは23ヶ所、禅の拠点はずでに100ヶ所を超えている。

徹玄グラスマンは、「私は前角老師より日本禅を学び、その法を受け継いだ。従ってそれを発展させる義務を負っています」と語る。

さて徹玄老師と前角老師の出逢いは1963年。グラスマン氏はロサンゼルス禅センターをはじめて尋ねたが、丁度前角老師は留守中。そこに應對したのが、私の師父大圓和尚（当時開教師）であったという。その日、そのときから二人は意気投合、以来一緒に坐禅に没頭し、いつしか前角門下として身を投じていた。その後の活躍は多岐に亘る。

前角老師遷化の後12年。前角老師によって蒔かれた仏種は地中深く根をおろし、時を得ていま勢いよく芽をふき、萌えだした。その中核をなす普及拠点がマサチューセッツ州ハートフォードの郊外に広がる緑豊かな森の中、現在は4万坪の大聖地。この場所に、世界中の弟子たちと宗門の関係者が参集し、前角老師のご命日である5月15日にオランダゼンリバーの天慶老師や北アメリカ国際布教総監秋

葉老師も列席の中、追悼供養とともに「MAEZUMI INSTITUTE」のオープンセレモニーが挙行されたのです。

インスティテュートの理念は①禅の研修と学術研究、②平和運動、③ソーシャルエンタープライズの3つ。新開地にはすでに禅堂を中心に必要最小限の施設が整い、山の各所に予定されている建物の杭があちこちに立ち並んでいる。

「前角インスティテュート」の在り方は明らかに日本曹洞禅とは現象面においていささか異なるように思います。10年前、アメリカ禅の事情を具に観て歩いた、師父と東隆眞学長（現大乘寺住職）は「アメリカ禅の拠点ではどこでも禅を深く学び、専門道場で徹底した只管打坐、禅サンガを形成しながら坐禅の修行は欠していない。ひとつには自己の真実性を学び、ひとつには現在アメリカ社会に貢献（或いは世界規模）する福祉活動である。いま世界が病み、生き方の根本的矛盾を解決し、人心救済をしようとする機能は、道元禅師の教えに従っており、アメリカの禅こそ、はじめて歴史的、社会的存在となって、人々に「生きる力」を与えようとしている」と結んでおります。今まさに「インスティテュート」に具現化しているように思いました。

私はこのオープニングセレモニーに参加して、法要に臨んだとき、師父大圓和尚の発願の心を読むことができたように思います。「横浜善光寺留学僧育英会」の原点がアメリカにあった。育英会存続のプロセスを見ると、半端でない師父の「生き方」と「徹し方」。到底、私はマネをしたくてできるものではありません。しかし、私には与えられた使命をしっかり受け止めて発展させる義務があることを強く感じています。

師父大圓和尚が抱き続けた夢と希望を追いながら、「前角インスティテュート」を離れ帰国の途に着きました。



オープンセレモニー

…お盆カーニバル in ロサンゼルス…

北アメリカ・ロサンゼルスのお盆各宗派のお盆風景を紹介します。
日本の伝統文化であるお盆が「お盆カーニバル」として民族を超えて親しまれています。
盆踊り・和太鼓・民謡・屋台・カラオケなどのエンターテインメントが華を添えます。

曹洞宗 ～ロサンゼルス禅宗寺～



ロサンゼルス本派本願寺別院

ロサンゼルスでも数千人の規模のメンバーを擁する最大の日系寺院西本願寺。通称、西本願寺羅府別院。



ランチも多く7月から8月にかけて、この別院の盆踊りを皮切りに毎週末、各ランチでのお盆が順番に催されます。



ロサンゼルスでのお盆の主役は盆踊り。太鼓をのせた櫓のまわりに、三重、四重の大きな輪を作り踊ります。

ガーテナ仏教会



夕涼みどき多くの人でにぎわいます。最近では日系以外の方が浴衣や盆ダンス(盆踊り)を楽しむ姿も珍しくありません。

住宅地の中にある西本願寺系の仏教会



食べ物の主流は、うどん、照焼きチキン、寿司。ほとんどのカーニバルで見かけます。

ウエストLA仏教会



地元の人にとっても屋台で売られる食べ物は年に一回の味。楽しみにしている人も多く人気です。人気があると早々に売り切れてしまいます。

西本願寺系仏教会



やはり一番盛り上がるのは盆踊り。ウエストLA名物「プレスリーズ」。

東本願寺羅府別院



境内(駐車場)に万灯が飾られお盆の雰囲気をかき立てます。中央には太鼓がのった檣。法被はおのおの所属しているお寺で色が違います。多くの人が毎週盆踊りをはしごしています。

ウエストコビナ東本願寺



お寺を持たず、コミュニティーセンターに間借りしています。それでもお盆はコミュニティーと協力して盛大に行われます。

高野山米国別院

リトル東京の中心に位置する高野山米国別院では、数年前から大変な労力を必要とするカーニバルをやめ、法要とフードセールのみを行うことになりました。



… 国際レポート / ハワイ …

ハワイ島ヒロ大正寺90周年記念式典 ～融和～

ヒロ大正寺住職・国際布教師 秋田 新隆



ハワイ島ヒロ大正寺は、1915（大正4）年、永平寺66世日置黙仙禅師が、米国サンフランシスコでの世界大博覧会に日本仏教各宗派管長代表として出席された後、ヒロに来錫され、6日間に亘ってヒロの名士、禅宗信徒に説法せられ、ヒロ市に曹洞宗寺院建設の必要を力説されたことに始まります。禅師の高徳なる温客慈眼に接し、檀信徒一同大正寺建設の大誓願を発し、1916（大正5）年4月6日、江澤白道師がホノルル別院より来廣されるや、日置禅師を勧請開山として敬仰し、永くその高徳を讃えることになりました。御開山の江澤師は、開教当初、降雨、泥土の中を、合羽を身にまとい、痩せ馬に跨り、遠い耕地に迄も黙々として布教に出かけられたと言われます。不惜身命の大信念をもって御精進なされたお姿が偲ばれます。

その後、2世井上富山師、3世村尾実英師、4世後藤古仙師、5世澁川太嶺師、6世木下靈牛師、7世穀蔵禅戒師、8世上野暉讃師、9世中島貫道師、10世青木俊亨師、11世加藤孝正師、12世吉田宏得師を経て、13世秋田新隆に到っております。

2006年3月5日、開創90周年記念式典を挙行し、今日までの歴住の功績と檀信徒の功勞に報いました。そして、これを機会に更に一層、当山の発展と教化の徹底に全力を捧げ、報恩行に精進せねばならぬ事を切実に感じ、仏祖の真前に広大なる御加護のあらんことを祈念いたしました。

大正寺は、創立記念行事を10年毎に行っておりますので、50周年、60周年（10世青木師代）、70周年（11世加藤師代）、80周年（12世吉田師代）の記録を参考に、1年前より準備委員会（委員長2名、委員6名、教団副会長4名、会計3名、書記2名、法要係4名、敬老者係4名、賞典係3名、プログラム係3名、記念誌係3名、写真係

2名、歓迎係2名、ホテル輸送係3名、催事主任1名、設営主任1名、宴会主任1名、広報主任1名、餅まき主任1名）を構成し、月1回の会合を持ちました。会合において、記念式のテーマは「融和」と決定しました。

薄日の射す当日の朝8時半、太鼓の合図と共に本堂前で餅まきが始まりました。9時より先亡開教師回向（導師：オアフ島ワヒアワ龍仙寺住職・総監部参事・駒形宗彦師）、檀信徒総回向（導師：秋田新隆）、90周年慶祝法要（導師：ハワイ国際布教総監町田時保老師）が営まれました。特筆すべきは、檀信徒総回向で10世青木師が作詩した「白峰山大正寺御詠歌」が、また、慶祝法要では創立60周年に同師が作詩した「記念奉讃御和讃」の「60年」を「90年」に変えたものが、大正寺梅花講員の先導で全員が唱えられたことです。

【大正寺御詠歌】

- 一、尊としや 打出す鐘は ヒロ港の
波に乗りつつ 法と広がる
- 二、美しや ケアからロアへ 七色に
称えことほぐ 虹の懸け橋

【大正寺創立90周年記念奉讃御和讃】

- 一、裾引く峰や マウナケアの 黍の緑に色映える
祖先のおわす大正寺 法灯ここに九十年
- 二、昇る朝日や ヒロ港の 波に映りし法輪に
心磨かん大正寺 禅風ここに九十年
- 三、龍胆桐と 梅の香に アントリアムの花添えて
匂う禅堂大正寺 宗風ここに九十年
- 四、雨風 津波猛るとれ 老いも若きも諸共に
いざや集わん大正寺 山風ここに九十年

式後、町田総監の法話、写真撮影が行われ、会場をヒロ郊外のナニマウ・ガーデンに移して、祝賀会を催しました。祝賀会では来賓紹介、曹洞宗管長表彰（2名）、ハワイ国際布教総監表彰（12名）、大正寺太鼓クラブの演奏、ハワイ曹洞宗寺院連盟会長渡辺憲市師の祝辞、会場主の謝辞があり、午後2時半に万事盛会裡に円成しました。

この祝賀行事には、ハワイ各島の洞門寺院より47名、日本からは静岡県志太郡岡部町萬松院三浦信孝師引率の9名、富士市永明寺加藤孝正師引率の8名、静岡市瀬名光鏡院・長沼法幢寺秋田弘隆師引率の20名が参加されまし



た。この中には、お忙しい中をわざわざお出でいただいた、島田市静居寺古川義雄師や志太郡大井川町磐石寺梶田恵光老師等もあり、式典に花を添えていただきました。

日本では、このような行事を行う場合、殆ど当該寺院住職が責任役員と相談の上、準備委員を選定して運営に当たるのが通例ですが、ここハワイでは教団長が理事会を招集して、その席上で準備委員を選定するので、住職は全体の相談役であると共に、役職の一部を担当することになります。また、準備委員会の席上では皆、激しい議論を戦わせますが、一旦決定した事項に関しては、当役の主任は勿論、皆が実に真剣にその任務を全うするために努力します。現在、役員は二世が一部、そして三世で構成されていますが、一世の時代から受け継がれた「お寺のため」という気持ちが行事を支えています。そして、共に行事を行うことによって、「住職はその割り当てられた役目を全うすることが行事全体を円満に了えることになるのだ」という気持ちになりました。ハワイで生まれ育った方が住職をしている寺院では違った行い方があるかもしれませんが、討議に十分に参加できない日本からの国際布教師では、これも致し方ないことだと思っています。

運営に当たってハワイ島では、輸送の問題が一番の難点でした。交通機関としては車しかないため、参加者の空港とホテル、寺、祝賀会場の移動はバスを利用しましたが、スムーズに運ぶことに気を使いました。

式そのものは前例にならってハワイスタイル(?)で簡略に済ませましたが、これが良いか悪いかは評価の分かれるところだと思います。また、歓迎係では仏旗の色に合わせてレイを作り、来賓・僧侶・寺族・敬老者・一般参加者と色分けして、それぞれに仏旗のいわれを書いたタグをつけました。3月4日の前夜祭は歓迎の意味を含めて、教団長の発想でカジノナイトと銘打って、YBAホールで実施しました。勿論、偽のドル札を用意してのゲームです。お寺の行事としては「どうかな」とも思いましたが、日本からの参加者も興がのるにつれて、一緒になって楽しんでいくようで安心しました。

以上のように90周年は何とか無事に終わりました。しか

し、10年後となりますと高齢者が多く、若いメンバーの少ない現在の教団では、100周年の実現が危ぶまれます。何とか若いメンバーを獲得して、教団の活性化を図らねばならないと痛感しています。

TAISHOJI DECEASED MEMBER'S MEMORIAL SERVICE

Officiated by Rev.Shinryu Akita

KOGO

The great path has no gates
Thousands of roads enter it,
When one passes through this gateless gate
He walks freely between heaven and earth.

Nine decades have gone by since Taishoji was dedicated by the founder Reverend Hakudo Ezawa and his members on April 10, 1916. Through many trying years, our members have combined their efforts to sustain the temple.

We are truly grateful to all the past and present members of Taishoji for their dedication, commitment and accomplishments. On this auspicious occasion of the Taishoji's 90th Anniversary, we have respectfully prepared incense, flowers, candles and pure water and offer up the chanting of Shushogi Chapter 1 and 2 and the Goeika so that the merit gathered herein may be submitted to those who were deceased in the past ninety years. It is our prayer that the deceased will always be surrounded by the love and compassion of the Load Buddha and, may they continue to rest in peace in the world of Nirvana.

Water flows, returning to the sea, its source.

The moon sets, but remains as part of the universe.



寄付者・会費納入者名簿 2006年7月15日まで

◆S Z I 会費納入者
2006年7月15日まで新規会員並びにご継続ありがとうございます。
(敬称略・順不同)

秋田県潟上市	自性院	鈴木道雄	東京都府中市	観音寺	市川明雄	長野県松本市	広沢寺	小笠原隆元
秋田県男鹿市	大竜寺	三浦賢翁	東京都西多摩郡	寶光寺	八坂良秀	長野県松本市	正麟寺	宮澤俊弘
秋田県秋田市	乗福寺	中泉俊	東京都八王子市	東照寺	宇田照彦	静岡県裾野市	興禅寺	松本好道
秋田県大曲市	天竜寺	八島国雄	東京都狹山市	泉龍寺	菅原昭英	静岡県三島市	宗徳院	山崎季晟
秋田県大曲市	大川寺	棟方清允	東京都清瀬市	長源寺	一適隆章	静岡県駿東郡	秀源寺	飯島誠之
秋田県山本郡	満友寺		東京都武蔵村山市	長円寺		静岡県富士市	永明寺	加藤孝正
秋田県山本郡	松庵寺	渡辺紫山	神奈川県川崎市	観音寺	佐藤憲剛	静岡県富士宮市	先照寺	
秋田県平鹿郡	月宗寺		川崎市中区	全竜寺	柳周峰	静岡県静岡市	法幢寺	秋田弘隆
岩手県岩手郡	満福寺	伊藤道人	神奈川県横浜市	東林寺	瀧田光久	静岡県静岡市	元長寺	
岩手県久慈市	清雲院		神奈川県相模原市	梅宗寺	館盛寛行	静岡県志太郡	磐石寺	梶田恵光
岩手県遠野市	長福寺	大矢慈光	神奈川県横浜市	中野東禅		静岡県榛原郡	大興寺	
岩手県岩手郡	大慈寺	田村優子	神奈川県横浜市	西有寺	横山敏明	静岡県静岡市	洗耳寺	長田敬道
岩手県九戸郡	宝積寺		神奈川県横浜市	興禅寺	市川智彬	静岡県静岡市	大慈悲院	野原史全
青森県弘前市	東海寺	太田宏見	神奈川県横浜市	貞昌院	亀野哲也	静岡県静岡市	山王寺	青山嶺雲
北海道松前郡	宝積院	伊藤禅龍	神奈川県横浜市	善光寺		静岡県静岡市	一乗寺	丹羽義裕
北海道美瑛市	法徳寺	村上直文	神奈川県横浜市	随流院	岩本英男	静岡県静岡市	宗徳院	松永然道
北海道野付郡	禪昌寺	長尾龍心	神奈川県横浜市	倫勝寺	馬場義実	静岡県静岡市	冷泉寺	木南広峰
北海道紋別郡	長福寺	川村寿光	神奈川県横浜市	永明寺	石田征史	静岡県焼津市	信香院	
東京都港区	明光寺		神奈川県鎌倉市	大船観音寺	山田茂雄	静岡県藤枝市	洞雲寺	糸柳格順
東京都港区	俊朝寺		神奈川県鎌倉市	黙仙寺		静岡県藤枝市	盤脚院	山田康夫
東京都港区	日本旅行東京法人		神奈川県鎌倉市	龍宝寺	梅田良光	静岡県静岡市	龍泉院	
東京都港区	営業部営業3課	田中良昭	神奈川県小田原市	善谷寺	乾宗俊	静岡県天竜市	栄林寺	櫻井孝順
東京都港区		桜井英幸	神奈川県茅ヶ崎市	延命寺	浅田正允	静岡県袋井市	満願寺	岩田弘之
東京都港区	石夢工房		神奈川県足柄上郡	泉秋寺	林辰哉	静岡県御前崎市	正福寺	
東京都港区	泉岳寺	奈良康明	神奈川県秦野市	宗胤寺	鳥澤俊寛	愛知県豊橋市	西光寺	小原智司
東京都台東区	法清寺		千葉県千葉市	福壽院		愛知県安城市	慈光院内	戸田規子
東京都台東区	正洞院		千葉県千葉市	海蔵寺	森田英仁	愛知県名古屋	龍潭寺	宮田春光
東京都台東区	出山寺	前田泰明	千葉県千葉市	観音寺	石井清純	愛知県名古屋	春江院	篠田一法
東京都台東区	福壽院	野口弘龍	千葉県千葉市	瑞岩寺	関光禅	愛知県名古屋	長松院	愛知学院大学学長 小出忠孝
東京都台東区	東禅寺	福田恵文	千葉県千葉市	龍心寺	伊藤仁志	愛知県名古屋	神蔵寺	柴田隆全
東京都台東区	玉宗寺	続道雄	千葉県八千代市	鏡徳寺	花和明雄	愛知県名古屋	(株)安江	安江英雄
東京都文京区	妙清寺	青木哲夫	千葉県南房総市	龍泉院	山田栄一	愛知県名古屋	地蔵寺	神野哲州
東京都文京区	喜運寺	磯貝昌隆	茨城県日立市	常真寺	北条正興	愛知県名古屋	永沢寺	岡島博司
東京都文京区	福寿院		茨城県日立市	光真寺	皆川広義	愛知県西加茂郡	天徳寺	加納博人
東京都北区	静勝寺	高崎忠道	栃木県鹿沼市	東光寺	黒田俊雄	愛知県知多郡	大黒寺	大洲久典
東京都北区	円通寺	佐藤大英	栃木県大田原市	金剛寺		愛知県豊田市	洞雲院	
東京都江東区	善徳寺		埼玉県さいたま市	円通寺	山喜光明	愛知県豊田市	霊岩寺	川橋範子
東京都品川区		土田由美子	埼玉県川口市	建福寺	小泉悟道	愛知県豊田市	神龍寺	
東京都品川区	瑞圓寺	木谷雅樹	埼玉県川口市	慈眼寺	安野正樹	愛知県江南市		江口みさ江
東京都世田谷区		菅原研州	埼玉県羽生市	興禅寺	武田秀嗣	愛知県瀬戸市	宝泉寺	江川辰三
東京都世田谷区	勝光院	田上太秀	埼玉県狭山市	東昌寺		愛知県一宮市	禅林寺	鶴飼宏史
東京都世田谷区		大場泰宜	埼玉県比企郡	見光寺	石塚正道	海部郡弥富町	松月寺	富尾智恵
東京都世田谷区		角田泰隆	埼玉県飯能市	正覚寺	石井早苗	岐阜県大野郡	正宗寺	原田道一
東京都新宿区	勝興寺	吉川弘眼	埼玉県飯能市	龍淵寺	岸世一	三重県志保郡	長楽寺	
東京都新宿区	大龍寺	太田賢孝	埼玉県熊谷市	東竹院	福島伸悦	高島市新旭町	正伝寺	北野良昭
東京都新宿区	竜門寺	藤井和彦	埼玉県熊谷市	興徳寺	廣田俊和	大阪府大阪市	妙壽寺	栖川隆道
東京都新宿区	宗参寺	西沢宏道	埼玉県熊谷市	龍泉寺	柿沼仁法	京都市下京区	宗仙寺	細川浩代
東京都新宿区	龍昌寺	岡本莊一	埼玉県熊谷市	楞嚴寺	稲田碩哉	京都市伏見区		佐久間顕一
東京都中野区	宝泉寺	赤松利章	埼玉県熊谷市	広徳寺	高橋秀雄	京都府亀岡市	苗秀寺	大谷俊定
東京都中野区	保善寺	上村映雄	埼玉県秩父市	宝持寺		京都府舞鶴市	正誓寺	山本現雄
東京都中野区	天徳院内	大藪美美子	埼玉県深谷市		新井隆司	京都府南丹市	祥雲寺	中小路岡道
東京都杉並区	青原寺	鈴木豊子	群馬県甘楽郡	昌福寺	荒井禮一	和歌山県和歌市	真福寺	辰巳大勇
東京都杉並区	天桂寺	秦慧孝	群馬県群馬郡	常楽寺	羽金文雄	倉吉市東町	大泉寺	池本宗倫
東京都杉並区	寶昌寺	田中芳周	群馬県群馬郡	普濟寺	岡部雅明	島根県安来市	大岳院	中村見自
東京都新宿区	観泉寺	佐藤昭次郎	群馬県高崎市	長楽寺	峯岸正典	岡山県苫田郡	松源寺	佐瀬道淳
東京都豊島区	清巖寺	来馬宗憲	群馬県伊勢崎市	長年寺		広島県広島市	成興寺	小倉玄照
東京都豊島区	祥雲寺	西沢応人	群馬県安中市	東善寺	山口淳一	山口県周南市	聖光寺	田中哲彦
東京都豊島区	オーシャントラベル		群馬県利根郡	昌雲寺	村上泰賢	新居浜市山根町	建映院	橋崎通元
東京都豊島区	全昌院	安達良元	群馬県大田市	桂昌寺	柴山輝行	愛媛県今治市	瑞心寺堂長	宇野尚英
東京都板橋区		黒川浩治	長野県中野市	宗泉寺		佐賀県伊万里市	瑞光寺	小島宗光
東京都板橋区		松月院	長野県佐久市	建明寺		北松浦郡世知原町	本光寺	中村覚道
				(有)オモロ	山口淳一	熊本県天草郡五和町	洞禅寺	村上和光
				桃源院	藤沢好文	宮崎県宮崎市	芳證寺	野田素裕
					山本健善	福井県福井市	善栖寺	つばた書店
						福井県武生市	洞雲寺	斎藤賢隆
						富山県黒部市	宗生寺	石塚良光
							東信庵	岩井恵澄

寄付者・会費納入者名簿 2006年7月15日まで

新潟県新潟市	興源寺	田宮黎友	山形県鶴岡市	宗伝寺	蓮池泰乗	東京都杉並区	観泉寺	田中芳周
福島県伊達郡	昌源寺	立花純孝	山形県鶴岡市	禅源寺		横浜市南区	興禅寺	市川智彬
福島県福島市	円通寺	吉岡棟憲	山形県東田川郡		佐藤孝子	富士見市下	興禅寺	武田秀嗣
福島県福島市	常円寺	阿部光裕	山形県鶴岡市	田種院	落合道正	北海道松前郡	法徳寺	伊藤禅龍
福島県西白河郡	善通寺	穴戸十善	山形県鶴岡市	保春寺	大八木春邦	東京都港区	泉岳寺	
福島県郡山市	長泉寺	石月聰明	山形県鶴岡市		難波真一	東京都中野区	青原寺	鈴木豊子
福島県二本松市	大隣寺	高松祖學	山形県鶴岡市	善寶寺		神奈川県横浜市	永明寺	石田征史
福島県喜多方市	安勝寺	高橋正純	山形県酒田市	持地寺	大瀧宗徳	茨城県日立市	鏡徳寺	山田栄一
福島県安達郡	石雲寺内	葉貫成悟	山形県西置賜郡	盤昌寺	大法良典	埼玉県上尾市	楞嚴寺	稲田碩哉
福島県耶麻郡	天徳寺	細川正善	山形県南陽市		佐藤紀昭	埼玉県秩父市	常楽寺	羽金文雄
福島県耶麻郡	長照寺	楠俊道	山形県尾花沢市	東光寺		群馬県安中市	宗泉寺	柴山輝行
福島県相馬市	洞雲寺		山形県最上郡	清林寺	渡辺禅悦	静岡県静岡市	大慈悲院	野原史全
宮城県仙台市	玄光庵		東田川郡立川町	見竜寺	池田好雄	静岡県静岡市	宗徳院	松永然道
宮城県仙台市	秀林寺		山形県東田川郡	延命寺	宮崎弘行	静岡県静岡市	洞雲寺	糸柳格順
宮城県仙台市	輪王寺		茨城県行方郡	養徳寺	河原無行	静岡県藤枝市	長松院	篠田一法
宮城県仙台市	江巖寺	我妻耕道	北高来郡高来町	和銅寺	宮崎輝郎	愛知県名古屋	常円寺	阿部光裕
宮城県名取市	東禅寺	三宅俊昭				福島県福島市	善通寺	穴戸十善
宮城県仙台市	洞雲寺	千田幹雄				福島県西白河郡	安勝寺	高橋正純
宮城県加美郡	皆伝寺	天野宏雄				福島県喜多方市	龍泉寺	北条正興
宮城県本吉郡	大雄寺	小島孝尋				茨城県西茨城郡	延命寺	宮崎弘行
宮城県栗原市	通大寺	金田諦典				山形県東田川郡	祇園寺	富井清孝
宮城県栗原市	城國寺	菅原英州				新潟県十日町市	広教寺	
宮城県仙台市	龍角寺	赤間直道				山梨県都留市		
宮城県栗原市	柳徳寺	荘司和成						
山形県東村山郡	慶松寺							
山形県米沢市	輪王寺	長谷川俊英						

◆賛助者 2006年7月15日まで

(敬称略・順不同)

神奈川県鎌倉市	大船観音寺
東京都港区	慈眼寺
東京都北区	福寿院
	桜井英幸

S Z I 通信

動 静 報 告

1月31日	役員会	曹洞宗檀信徒会館
2月28日	役員会	曹洞宗檀信徒会館
	総会・講演会・懇親会	曹洞宗檀信徒会館
4月7日	会報編集会議	東京
6月23日	大本山總持寺ワークショップ	大本山總持寺
7月3日	大本山永平寺ワークショップ	大本山永平寺
7月25・26日	夏期大学講座協力	曹洞宗檀信徒会館

インターネットにて随時役員会を開催しています。

編 集 後 記

お盆の準備や法要と重なるため、この時期の会報発行は毎回、時間との戦いです。特に9月には、ゆめ観音やドイツ普門寺晋山結制が控えているため、各編集担当はいつも以上に忙しく、メ切ぎりぎりでの編集でした。しかし、ロサンゼルス「お盆カーニバル」の盛況ぶりなどを見ると、異文化の中で100年近くも世代を超えて日本の伝統を受継ぎ、守っている人々の姿が目に見え、「私も頑張らなくては」と心が改まりました。(館盛寛行)

S Z I ホームページ運営中!

ご意見・ご質問等、
スタッフ一同
お待ち申し上げます。

S Z I では、活動報告の他、皆様との交流の場を設けております。お陰様で日本も含めて世界各国の方々にご覧頂いており、好評もいただいております。今後より一層、情報の共有を交流の促進のために、これまでのホームページとBBS(掲示板)に加えて、S Z I のブログサイトも設けております。

<http://www.soto-zen.net/>
<http://www.soto-zen.net/blog/>

第8回 ゆめ観音 in 大船 開催のお知らせ

～ つながる ひろがる アジアのねがい ～

YUME KANNON, Asia Festival



2006 年 9 月 2 日 (土) 12:00-20:00

入場料 300 円 (アジア支援各団体の寄付として)

会 場 : 大船観音寺

特別法要 万燈供養

会場にお越しのみなさま、アジアゆかりの方々の願いを込めた法要です。

■ その他、舞台、会場展示で多数のエントリーをいただいております。皆様のお越しをお待ちしております。

■ 詳細は <http://soto-zen.net/yume> をご参照ください。

主催／ゆめ観音実行委員会 (大船観音寺・SOTO禅インターナショナル・神奈川県第二宗務所 第五教区)
後援／鎌倉市・神奈川県国際交流協会

問合せ／大船観音寺 0467-43-1561 (松山)・SOTO禅インターナショナル kameno@teishoin.net (亀野)